

## 実践事例4

## 生かされていることへの感謝 - 「運命」から「使命」へ -

県立農業高等学校第1学年畜産科

## 1 テーマ

生かされていることへの感謝 - 「運命」から「使命」へ -

## 2 実践のねらい

「農業」の中でも、特に「畜産」を学ぶ生徒たちの体験的な学習・実習や特別活動を、言葉に表すことで、自己肯定感を持たせていく。また、「生きる」ことが、「他の命とつながる」ことであるということ、「書く」という作業や「読む」という作業の中で確認させる。

人は皆、与えられた運命の中で生きるが、その中で、自分の命をどう使っていくか（使命）について考え、自らの生き方を模索する。

## 3 テーマ設定の理由

## (1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は2007年に創立110年を迎え、卒業生約2万名を輩出する、歴史と伝統のある農業科の専門高校である。学級数は24クラス、定員960名で、8つの専門学科を有していたが、2009年度から、学科編成により7学科（農業科・園芸科・動物科学科・食品科学科・農業環境工学科・造園科・生物工学科）となった。校訓の「たゆまぬ研鑽、豊かな情操」の精神を基調に、豊かな創造性と深い人間愛の精神を身に付け、自らが主体的に判断し行動するところ豊かでたくましく生きる力にあふれた人材の育成を目指している。

加古川市東部に位置し、生徒は地元の東播磨を始め、阪神、西播磨並びに北播磨地区など遠方からも通学しており、多様な環境や能力を持った生徒たちが入学してくる。生徒たちは、農業について学ぶ中で日々「命の大切さ」に向き合っているが、中学時代に受けたいじめや低学力などで、自己肯定感を持ってない生徒もいる。

「農業」で学ぶ「命の大切さ」を、普通科（国語科）の授業や、特別活動の中で確認していくような、横断的な取組として今回のテーマを設定した。

## (2) 指導のポイント

## 【感動の体験】

- ・文学作品、講演、鶏の解体実習、「内観」を通じて、支えられて生きていること、命がつながっていることなどを実感させる。
- ・「私の大切なもの」の紹介、「内観」という自己開示の体験をとおして、自分を肯定すること、肯定してもらえらることの大切さを実感させる。

## 【感性を育む】

- ・「内観」や「言葉の花束」を通じて、他者を思いやり、人間関係を取り結ぶことが、「生きがたさ」を取り除いてくれることを感じさせる。
- ・作中人物の心情を理解することで「生きること」「生かされていること」への考えを深めさせる。

## 【想像力の育成】

- ・様々なものから「生かされている」こと、生きて在ることに感謝の念を持たせる。
- ・文学作品や鶏の解体実習などとおし「死」を鏡として「生」を認識することで、命のつながりを想像させる。

#### 4 事前

##### (1) 先生の準備

- ・教員自身が、すべての教育活動の中で、命を大切にすることを心や態度を忘れないようにする。
- ・教材の選定にあたって、「命の大切さ」という視点を持ち、生徒への意識付けを心がける。
- ・生徒が、「命」について、どういう思いを持っているかを把握するために、生徒の作文や感想文に、丁寧に目を通し、生徒の思いを把握する。
- ・教員自身が「内観」時のファシリテーターを務めることができるような研修を実施する。
- ・「命の大切さ」や「人と人とのつながり」についての講演会を企画する。
- ・子どもの家庭環境をよく把握し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮しておく。
- ・農業科の教員や養護教諭、キャンパスカウンセラーなどと、学習の目的やその後のケアなどの打ち合わせをする。
- ・畜産科の実習や行事など、できるだけ参加して、生徒の様子を観察し、気持ちの上で寄り添うことができるようにする。

##### (2) 教育課程上の位置づけ

- ・国語（現代文）
- ・畜産（農業）
- ・特別活動（LHR・畜魂祭）

##### (3) 子どもたちの準備

- ・国語（現代文）の教材を「命の大切さ」という観点で考える。
- ・畜産科の実習で感じたことを「書く」ことで、「命」への思いを確認する。
- ・10秒呼吸法の訓練をする。
- ・夏季休暇課題で「命」に関する本の読書感想文を書く。

##### (4) 家庭・地域との連携

「内観」の場面では、生徒自身も気づけなかった、保護者に対する思いが明らかになる場合もある。事前に家庭環境等を含んだ生徒の状況を十分把握しておき、個別の配慮に細心の注意を払うことが必要である。

#### 5 本校の実践の特色

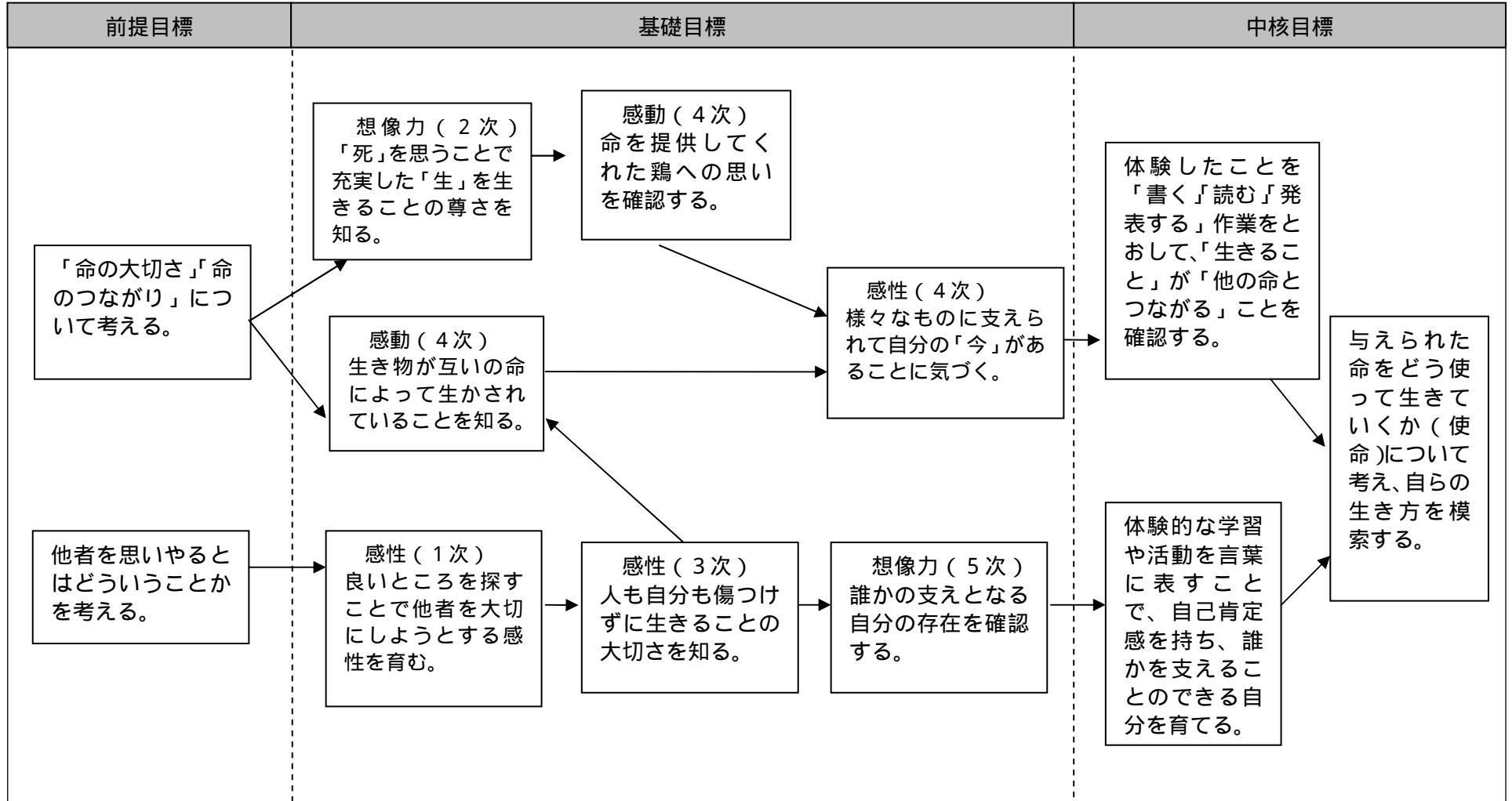
今回は、農業高校の生徒の中でも、特に1年生の畜産科を対象として実践した。畜産科の1年生では、鶏の飼育・解体実習を行う。自分が育てた鶏を解体することで、畜産に携わる生産者としての意識を持たせるわけであるが、そうした取組を、国語の教材やLHR、学校行事とリンクさせることで、生徒一人一人の中で「命の大切さ」がより強く、深く定着できるようにしていきたい。本単元では、農業高校の畜産科で学んだことの集大成として、「生かされている自分に気づく」ことを目標とした。

体験を言語化することも、国語科の役割であると認識している。言語化した体験がまた、これからの生徒の生きる標（しるべ）になる。思ったこと、考えたことを残す中で、必ず「生かされている」ことへの感謝が生まれてくると思いたい。そして、その感謝の気持ちをとおして、「他者を支えられる生き方」「生まれてきたことの使命を果たせる生き方」がどんなものかを、生徒一人一人が模索していけるようになれば、理想的である。

## 6 目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	国語の教材を「命の大切さ」という観点で考える。 10秒呼吸法の練習をする。	「命」について自分の思いを素直に表現する。 気持ちを落ち着かせる。	他者を思いやることとはどういうことかを考える。	「死」を鏡として「生」を認識することで、命がつながっていることを想像する。	
1次 (5時間)	「私の大切なもの」について作文を書く。 「私の大切なもの」について発表する。 発表内容を相互評価し、お互いの良いところを認め合う。	自分が大切にしているものについての共感を得ることで、自己肯定感を持つ。 発表内容や態度を認めもらうことで喜びを感じる。	クラスメイトの発表を聞き、良いところを探すことで、他者を大切にしようとする感性をはぐくむ。	今までの自分を支えてくれた人・ものが存在したことに思いをいたす。 自分とは違うものの考え方を受け入れる。	入学後間もない時期に実施することで、自己紹介・自己開示させることができたか。 多様な価値観を持つ他の生徒の発表に触れ、自分と違う価値観も受け入れさせることができたか。
2次 (8時間)	随筆「希望」(大石芳野)を学習する。 小説「一瞬を生きる」(原田宗典)を学習する。 絵本「100万回生きたねこ」(佐野洋子)を教材にホームルーム活動をする。	生き延びるために「希望」を持ち続けたユダヤ人の実話に触れる。 「死」を前にした登場人物の行動をとおして「生」の尊さを知る。	人が人の命を守ることの尊さを実感する。 愛する者・支えてくれる者があることのありがたさを感じ取る。	「死」を思うことで、充実した「生」を生きることの尊さを知る。 人の命は、肉体的にも精神的にも受け継がれていることを考える。	作者の問いかけに生徒がそれぞれの答えを模索することができたか。 命に限りがあること、死後も命がつながっていくことを理解させることができたか。
3次 (6時間)	性教育講演会 人権教育講演会「障害を乗り越えて」 生徒指導講演会「人の心の不思議さ」 「命」をテーマにした作品の感想文を書く。	パラリンピックで入賞した方の話を聞くことで、夢を持ち目標に向けて努力することのすばらしさを感じ取る。 「命」をテーマとした作品の世界に触れる。	心の持ち方で、対人関係が変わってくるという話を聞き、人も自分も傷つけずに生きていく感性を養う。	性教育や対人関係など、専門家の話を聞くことで、命の大切さや人とのつながりのすばらしさに気づく。	講演会や読書感想文を書くことを通じて、人と人とのつながりや生きることの大切さについて考えさせることができたか。
4次 (26時間)	小説「なめとこ山の熊」(宮沢賢治)を学習する。 畜魂祭に参加する。 鶏の飼育・解体実習を行う。 実習の感想を書く。	作品をとおして、生き物が互いの命によって生かされていることに気づく。 畜魂祭で、畜産科の生徒としての自覚を深める。 飼育、観察、解体することで、生命の不思議さに触れる。 命を提供してくれた鶏への思いを確認する。	作品中の生命観・人間観・自然観について理解を深める。 家畜の生命に感謝の念を持つ。 畜産に携わる者の使命を考える。 様々なものに支えられて生かされていることに感謝する。	「死」が再生に結びつくという作品の主題を理解し、生きることの意味について考える。 先輩が愛情を持って家畜を飼育してきたことを思いやる。 命あるものを殺すことの意味について考える。 店頭の肉にも愛情を持って育てた人がいることを思う。	文学作品や農業実習、学校行事をとおして、すべての生き物が「生かし生かされる連鎖」の中にいることを理解させることができたか。 家畜へ感謝の念をもち、責任を持って飼育する気持ちをもたせることができたか。
5次 (3時間)	「内観」をして、お世話になった人・かけがえのない人について考える。 「言葉の花束」を贈り合う。	何気なく接している人や動物が自分の支えになっていることに気づく。 クラスで認められている自分に気づく。	亡くなった人も、自分の中で生き続けることを感じる。 あたたかい言葉や優しい言葉が人を励ますことを感じる。	誰かの支えとなる自分の存在を確認する。	支えてくれる人のおかげで生きていることに感謝の気持ちをもたせることができたか。 言葉の持つ力を実感させることができたか。
事後	高校生活を振り返り、どう生きていくかを考える。	自分が支えられ、誰かを支えている存在であることを感じる。	他者への思いやりが人間関係を作ることを理解する。	生かされていること、「死」を超えた命のつながりを想像する。	

7 目標構造図



## 8 事前の教員研修と指導の概要

## (1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

研修内容	
a	生徒の思い、家庭環境を把握する。 ・生徒の「命についての思い」を把握するために、作文や感想文に丁寧に目を通す。 ・生徒の家庭環境を把握し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮しておく。
b	自己再発見の体験をする。 ・「私のかげがえのない人」 < 提言 p72：教員研修テーマ >
c	講演会の企画と感想の集計 ・「命の大切さ」や「人と人とのつながり」についての講演会を企画する。 ・生徒の感想を読むことで、生徒理解を深める。
d	各部署（部・学年・科・養護教諭・キャンパスカウンセラー）との連携 ・農業科の教員や養護教諭、キャンパスカウンセラーなどと、学習の目的やその後のケアなどの打合せをする。 ・学科の実習や行事などに参加して、生徒の様子を観察し、気持ちの上で寄り添うことができるようにする。

## (2) 指導の概要（全48時間）

内 容	
事前	教員自身が「命の大切さ」についての思いを深める。 生徒への理解を深める。 行事や授業について関係者との連携を図る。
1次 (5時間)	自己開示して、お互いの思いとその違いを認め合う。 1 「私の大切なもの」について作文を書くことで、今までの自分を支えてくれた人、ものへの思いを振り返る。(1時間) 2 作文を原稿として、クラスメイトの前でスピーチすることで、コミュニケーション能力を養う。(3時間) 3 スピーチを相互評価し、お互いの良いところを認め合う。(1時間)
2次 (7時間+1時間)	小説や随筆を学習し、絵本を読むことで、命に限りがあること、死後も命がつながっていくことを理解する。 1 「希望」(大石芳野)を学習し、「希望」を持つことで生き延びることができたユダヤ人の人生について考える。(2時間) 2 「一瞬を生きる」(原田宗典)を学習し、末期癌の老カメラマンが、若いスタジオマンに伝えたかったことを理解する。(5時間) 3 「100万回生きたねこ」(佐野洋子)の絵本をとおして、限りある命だからこそ大切にしなければならないことを理解する。(LHR 1時間)
3次 (6時間+課外)	講演会や読書を通じて、人と人とのつながりや生きることの大切さについて考える。 1 「性教育講演会」(特別活動2時間) 2 「人権教育講演会 - 障害を乗り越えて - 」(特別活動2時間) 3 「生徒指導講演会 - 人の心の不思議さについて - 」(特別活動2時間) 4 夏季休業中に「命」をテーマとした作品を読み、感想文を書く。(課外)

教員研修c

4次 (26時間+課外)	<p>文学作品や農業実習、学校行事をとおして、「生かされている」ことについて考える。</p> <p style="text-align: center;">指導実践 p50～p58</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「なめとこ山の熊」(宮沢賢治)の学習をとおして、すべての生き物が生かし、生かされる連鎖の中にいることを理解する。(5時間)</li> <li>「畜魂祭」で、家畜への感謝の気持ちを新たにする(特別活動1時間) <span style="float: right;">教員研修 d</span></li> <li>鶏の飼育実習、解体実習を実施する。(畜産20時間)</li> <li>冬季休業中に鶏の解体実習の感想を書くことで実習を振り返り、他によって生かされていることについて考える。(課外) <span style="float: right;">教員研修 a、b、d</span></li> </ol>
5次 (3時間)	<p>支えてくれた人のおかげで今があることに思いをいたし、生きて在ることに感謝の気持ちをもつ。</p> <p style="text-align: center;">指導実践 p59～p64</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「内観」(自分の内面を観る)で、お世話になった人を思い出し、「迷惑をかけたこと」「してもらったこと」「してあげたこと」について考える。(2時間)</li> <li>1年間一緒に過ごしたクラスメイトにメッセージを贈り、贈られることで友人との絆を確認する。(言葉の花束)(1時間)</li> </ol>
事後	<p>1年間をとおして、「命の大切さ」について学んだことを振り返る。</p>

## 9 指導実践

4次	文学作品や農業実習、学校行事をとおして、「生かされている」ことについて考える。
----	---

## (1) 「なめとこ山の熊」(宮澤賢治作)『国語総合』現代文分野(5時間)

熊と人間との殺し殺される関係を描いた、せつない物語。猟師の小十郎は、老母と孫たちとの生活のために熊を撃って、その毛皮や胆も金銭に換えなければならない。その「因果」を背負う小十郎を熊たちは「好き」と、作者は描く。

## ア 本時のねらい

学習をとおして、すべての生き物が生かし生かされる連鎖の中にいることを理解する。

## イ 指導のポイント

## (ア) 感動の体験

宮澤賢治の童話の世界をとおして、自然界では、生き物が互いの命によって生かし生かされていることに気づかせる。

## (イ) 感性を育む

物語の中に込められた、生命観や人間観、自然観について理解を深めさせる。

## (ウ) 想像力の育成

「死」が再生に結びつくという、この作品の主題を理解し、生きることの意味について考えさせる。

## ウ 初発の生徒の感想

- ・熊も小十郎もかわいそうと思った。
- ・この話は悲しい話だなあと思った。何もしていない熊が次から次へと殺されていくところと、最後に小十郎が死んでしまうところが特に悲しかった。僕には、何もしていない熊を殺すことは絶対できないと思う。今度、鶏をヒヨコから育てて、自分の手で殺すときが来ます。その時僕は、泣きながら殺していると思う。

## エ 学習後の生徒の感想

- ・小十郎と熊には信頼関係がある、小十郎は熊の言葉がわかってしまって熊を殺せなくなってしまったけど、私も、もし鶏の言葉がわかってしまったら、わからなくても殺すのは嫌なのに、余計に殺すのが嫌になると思う。
- ・主人公の小十郎は、畜産科の先生にそっくりだと思った。宮澤賢治も似たような人なのかと思う。
- ・小十郎は、自分に与えられた因果に苦しみながら、それを受け入れて死んでしまったが、死ぬことによって熊に対して許されて、死に顔が笑みを浮かべていたんだと思った。
- ・世の中の食物連鎖のことを書いていると思った。

## オ 先生の振り返り

小十郎という熊の猟師と熊との関わりを、畜産科の生徒がどんなふうにとらえるかに興味があった。鶏の解体実習と重ねて書いている生徒もいた。猟師と畜産業には共通する部分もあると思える。

## (2) 「畜魂祭」特別活動1時間（県農祭の前日 11/22 13時～14時）

## ア 本時のねらい

家畜への感謝の念をもち、責任を持って家畜を飼育する気持ちを新たにします。



畜魂祭の様子



## イ 指導のポイント

## (ア) 感動の体験

最大の学校行事である「県農祭」の前日に「畜魂祭」を行うことで、農業高校畜産科の生徒としての自覚を深めさせる。

## (イ) 感性を育む

3年生が述べる畜魂の言葉を聞き、畜産科の生徒として家畜の命をとおして学習を進めていることの重みを考えさせる。

## (ウ) 想像力の育成

授業で教材として扱う家畜たちに対して、代々の先輩たちが愛情を持って接してきたことを思い、畜産科の一員としての思いを深めさせる。

## ウ 準備物

- ・「畜魂のことば」(3年生が考える。) ・献花、水など。

## エ 先生(畜産科)の準備

- ・各類型(乳牛・肉牛・養豚・養鶏)の代表者を選び、「鎮魂のことば」を考えさせる。
- ・畜産科の教員、担任、管理職などの参加依頼

## オ 展開

(ア) 司会の生徒によって進行する。

(イ) 畜産科の生徒たちは、学年毎に整列する。

(ウ) 3年生各類型の代表者が「畜魂のことば」を述べる。

(エ) 生徒一人一人が菊の花を持ち、畜魂碑に手向け、お参りする。

## カ 先生の振り返り

日頃活発な生徒も、神妙な面持ちで畜魂碑に向かう。3年生代表者の「畜魂のことば」を聞くうちに涙ぐむ生徒も多く、飼育して出荷した家畜や病気・怪我などで死んだ家畜を思い出したのか、泣き出す生徒もいた。

## 鎮魂の言葉

私達は学びの場である畜舎で、牛や豚の誕生の瞬間に息をのみ、子牛の黒い瞳の輝きに愛らしさを感じ、羽はたく鶏、元気に動き回る子豚と戯れ、全ての動物を愛しいものとして、夏の暑い日も、寒い冬の日もともに育つ喜びを感じ、命とともに成長してきました。

しかし、なかには成育半ばで悲しくも尊い命を消してしまつた動物の魂に対し、私達は感謝の気持ちを忘れてはなりません。

動物は、人が食べることでできない草や雑穀を食べ、乳や肉、卵などを生産し私達の生活に提供してくれます。

動物は、命を代償として、私達の生活を支え、豊かにしてくれました。これは紛れもない事実です。動物を飼い、生産物を利用する物質循環の中で、人と動物がいかに共存し、ともに栄える事ができるかということを考え続けていかねければなりません。

私達の学びの糧として命を終えた動物たちの魂よ、どうか安らかに眠りください。そしていつまでも県農生を見守り続けてください。

平成二十年十一月二十二日



## (3) 鶏の飼育実習、解体実習を実施する。（畜産20時間）

## ア 本時のねらい

鶏の飼育をとおして、家畜の飼育方法を学び、責任を持って命を育てる。そして、自分で飼育した鶏を解体することで、命のかけがえのなさ・尊さを感じる。

## イ 指導のポイント

## (ア) 感動の体験

雛を飼育することで成長の様子を観察し、解体することで臓器の確認をするなど、生命の不思議さを感じさせる。

## (イ) 感性を育む

飼育の体験から解体の体験を経て、畜産業に従事する者としての使命を考え、生かされていることへの感謝の気持ちをもたせる。

## (ウ) 想像力の育成

鶏を飼育する体験をとおして、自分を育ててくれた人・ものに対しての思いをもち、解体の体験をとおして、命あるものを殺すことの意味について考えさせる。

## ウ 準備物

（飼育） ・ブロイラー舎 ・鶏の雛

（解体） ・実習服、帽子、長靴 ・タッパー、ビニール袋（2kg程の肉を入れる）  
・タオル、ゴム手袋、軍手

## エ 先生の準備

「畜産」担当の教員に授業見学の許可を得て、取組の趣旨を理解してもらう。

## オ 展開

## (ア) 平成20年10月17日（金）2時間

## 授業の展開

先生（担当者）「君らに命を預けるから、自信と責任を持って育てるように。君らは、その命をもらうんやからな。」

- ・鶏の雛を生徒一人一人に配布する。
- ・体重・脚の長さを測定する。
- ・餌やり、水やりについての説明を受ける。

## 生徒の様子

生まれたばかりの鶏の雛はふわふわで温かく、可愛い。生徒たちは、優しい表情で嬉しそうな声を出していた。

受け取ったばかりのヒヨコを  
そっと手のひらに載せる



ヒヨコの体重測定

脚の長さを測定



(1) 平成20年10月27日（月）2時間

授業の展開

- ・ 鶏の雛を識別できるように、番号のついた脚帯を付ける。
- ・ 体重、脚の長さを測定する。
- ・ ワクチンの投与（点眼、羽根）

生徒の様子

少し大きくなったヒヨコに識別番号を付けると、自分の雛としての認識が高まっていくように感じる。ワクチンを投与するときに、「病院に行こうね」と声を掛けている様子は、我が子に語りかけているようだった。



少し大きくなったヒヨコ



ヒヨコに  
ワクチン接種



(ウ) 平成20年11月10日（月）2時間

授業の展開

- ・ 成長した鶏に合うように大きな脚帯に付け替える。
- ・ 体重、脚の長さを測定する。

生徒の様子

「でか!」「脚太い!」「もう、ヒヨコじゃない!」と言った声が、あちらこちらから聞こえる。確かに、赤い鶏冠（とさか）のある鶏には、もうヒヨコの面影はない。



(I) 平成20年12月15日（月）4時間...解体実習

授業の展開

- 8:30 実習服に更衣、畜産実習室に集合、点呼
- 8:40 実習説明
- 鶏の移動
- 放血・脱羽（脱毛室）
- 解体実習（食品加工科棟）
- 12:35 終了





先生から説明を受けながら  
解体を行う。

#### 生徒の様子

大きく成長した鶏を大事そうに、抱きかかえていた。「これは肉！これは肉！今日の晩ご飯！」という声が聞こえてくる。今まで育てた鶏を、鶏としてではなく食材として考えようと、自分に言い聞かせているように感じた。「先に死んでくれ～！」と叫ぶ生徒もいて、自分で殺すより、死んでくれればいいのにと思っている様子がうかがえた。泣いている女子もあり、クラスメイトが、「勉強やん、勉強！」「畜産科やろ？」と声を掛けていた。死んでしまった鶏に、「さっきまであんなに可愛がったのに...」「さっきまで、だっこしとったのに...」と涙ぐむ姿も見られた。

解体時には、畜産科の先生から、臓器の説明を受けたり、お互いに教え合ったりしていた。

#### カ 先生の振り返り

##### < 畜産科担当者より >

生きた動物を育てることと、育てたものを消費することは相反する営みである。特に殺して食品にするということは、ふだんできないことであるが、畜産科の授業としては必要なことである。生徒にとっては今まで経験しなかったことでもあり、刺激が強すぎることもある。しかし、この実習を経験することにより、生徒たちの「食への見方」が大きく変わると思える。

##### < 筆者の振り返り >

飼育・解体実習は、班ごとに実施されていた。畜産科の先生の指示を受けながらも、グループやクラスの仲間がお互い助け合いながら実習を進めている様子が印象的だった。国語の授業中には見られない生徒の一面を見ることもできた。生徒は、授業中だけでなく、決められた当番（時間外総合実習）の際にも、鶏の飼育をしている。当番でなくても、毎日自分の鶏の世話をしに来る生徒もいたようである。4時間の実習であったが、あっという間に、生きている鶏が鶏肉になっていった。

## (4) 冬季休業中に鶏の解体実習の感想を書く。（課外）

## ア 本時のねらい

体験を言語化する取組をとおして、実習を振り返る。

## イ 指導のポイント

## (ア) 感動の体験

解体実習を振り返り、文章にすることで、命を提供してくれた鶏への思いを確認させる。

## (イ) 感性を育む

今回の実習だけでなく、様々なものに支えられて今があることへの感謝の気持ちをもたせる。

## (ウ) 想像力の育成

店頭に並ぶ肉にも愛情をもって育てた人がいることに気づかせる。

## ウ 準備物 原稿用紙

## エ 先生の準備

本校の卒業生の作文（中学校道德の副読本に採用）を紹介し、感想文を依頼する。

## 感想文の依頼

## 一年畜産科の皆さんへ

鶏の飼育実習が終わり、解体から一週間あまり過ぎました。

ヒナ鶏を受け取ったときからの皆さんの様子を、見学して、私自身も思うことがたくさんありました。県農での私のスタートは、畜産科二年生の担任でした。意見発表の作文に「鶏の解体実習」のことを書いている生徒がたくさんいました。私は、その内容を読んだり聞いたりしながら、「すごいなあー」と思いました。でも私は、二年間担任した生徒たちが、その実習をしている場面を見たことがありませんでした。今回、この実習をほんの少し覗かせてもらって、卒業していった生徒たちに、もっと近づけたような気がします。どうもありがとうございます。実習の見学を快く認めてくださった畜産科の先生方にも感謝しています。

御礼を言った後で、畜産科の皆さんに課題を出すのは心苦しいですが、この冬休みに、鶏の飼育実習を振り返って、作文を書いて欲しいと思います。二年生になったら、意見発表の題材に取り上げることもあると思います。ただ、今回の実習だけでなく、二学期に学習した「なめとこ山の熊」を振り返ったり、「畜魂祭」のことを思い出したり、日頃の総合実習や当直などのことも織り込みながら書いてください。今の皆さんなら、熊の猟師として熊を殺して売ることが商売にしていた小十郎の気持ちに、近づくことができるでしょう。

皆さんは、普通科の、あるいは県農生であっても、他の科の生徒が体験できない貴重な体験をしています。この体験を言葉の力で自分の中につなぎ止めておくことは、大切な作業だと思います。「書く」ことで、「今、生きて、在ること」が証明されます。

何かと忙しい冬休みでしょうが、最初の現代文の授業（一月十四日）で提出してください。参考に卒業生の作品を配布します。来年度の中学校の道德の教科書に掲載予定です。2000年に卒業した生徒です。皆さんよりも十年程先輩の方ですが、思いは同じではないでしょうか。全国的に見ても、素晴らしい体験をしていることを今更のように感じます。

## オ 生徒の作文（抜粋）

- ・自分の手で雛から可愛がってきたニワトリを、自分の手で殺さなくてはならないことを知って、いやだと思っていましたが、かわいそうだと思わずに、人間のために死んでいくニワトリの命の分まで生きていくことが、一番大切じゃないかなって思いました。
- ・今回の実習で、命の重さと大切さを学びました。雛はとても可愛くて、作業が終わるたびにケージから出し、じゃれ合っていました。そのひとときが楽しかったです。…体重もだんだん重くなって、いつの間にか羽も生え、ニワトリっぽくなっていきました。…屠殺の日になりました。ニワトリは殺されるのをわかっているかのように、突然暴れ出しました。かわいそうでした。屠殺する前から泣いている人もいました。…自分の番が来て先生が言った場所をナイフで切るときに、私は一回では切れなくて「もう一回」と言われ、私はもう一回首を切りました。そしたら、グサッと音がして感触が伝わってきました。私は涙が出そうでした。機械に入れられ羽を取られ、最後は残っている羽を自分で取る作業でした。でも私は、羽が無くなった自分のニワトリを見た瞬間、手が震え身体が動きませんでした。
- ・…そして私の番が回ってきました。最初は、「えーっ」って感じで勇気が出なかったけど、自分でヒヨコからここまで育ててきたから、最後までしてあげなな…と思い、勇気を振り絞って首を切りました。…この経験をとおして、命の大切さがわかりました。ふだん普通に食べている肉や魚の大切さもわかりました。いつも食べものを残したりするけど、それはいただいた命だから、最後まできちんと食べないといけないなと思いました。
- ・小さなヒヨコを受け取った。最初はよちよちして、黄色い毛は暖かく可愛らしい。体重は十数グラムに過ぎない。周りは珍しいやら可愛らしいやらでわいわいしていたが、もうこの時から、最終的には食肉にするという覚悟は決めていた。…いつの間にか体重が2キロを超えて、いよいよ食べそうなニワトリになった。…愛情をかけない方が楽だ。屠殺した後、感傷に浸らなくて済む。愛情をかける方が損だ、と思っていた。でも、最後には、愛情をかけ育てた方が良かったかもしれない。説明はできないけど、やっぱりそう思える。
- ・私は担当の雛に「ももちゃん」という名前を付けて、「私がももちゃんの親だよ。」と何回も言いました。…ももちゃんが成長していき、楽しかった時間や大変な時があったけど、あっという間に過ぎていきました。とうとう最後の日が来たとき、いろいろと不安でした。「苦しめないように殺せるかな。」「今まで、ももちゃんに何をしてあげたのだろうか。」ということなどが頭をよぎりました。屠殺はすぐに終わりました。最後も、ももちゃんに「今までありがとう。ももちゃんのおかげで命の大切さを学べた。」と感謝の気持ちを伝えました。…一生忘れられない体験になりました。
- ・鶏の首を片手で持ち、牛刀で首を切る、逆さにして血抜きをする。正直、切るまではつらいが、その後の作業を考えると楽な方だと思う。お湯につけ、手で羽を抜く。頭を切り落として、足は切れ目を入れて引き抜く。手羽、足、胸、ささみ、がらに切り分ける。もも肉をはずす。手羽、胸肉をはずす…内臓を取り出す。最後の方になると疲れてきた。一羽を解体するためには、すごい体力を使うし、集中力もいる。

## カ 先生の振り返り

感想を読むと、愛情をかけずに育てようと努力していたり、とても可愛がって育てたりと、生徒たちは、雛に対して様々な接し方をしている。しかし、一様に、「今までしたことのない」体験、「普通はできない」体験に、その体験を大切にしたいと考えていることがわかる。そこには、「畜産科だから！」という思いも感じられる。生徒に達成感を感じさせ、畜産科の生徒としての自負を持たせるのに、貴重な体験のできる授業である。

## (5) 学びの広がり - 命の大切さを伝える -

畜産科の2年生（山田詩織さん）が母校（神戸市立福田小学校）で「命の尊さ」をテーマに話をした事例を紹介する。

## ア 小学校の校長先生が出されている「学校だより」より

平成20年3月11日(水)に、兵庫県立農業高等学校畜産科での実習を通した「命の大切さ」について、皆さんの先輩から6年生へ話をさせていただきました。

## &lt; 話の要旨 &gt;

今日、私が福田小学校を訪問したのは、もうすぐ卒業する6年生の皆さんに、「命」の大切さを知ってもらいたいと思ったからです。私が通っているのは、兵庫県立農業高等学校です。そこにはいろいろな科があり、私は畜産科で勉強をしています。畜産科では、普通の学校と同じく英語や数学も勉強していますが、鶏肉や豚肉、牛肉、卵、牛乳などを生産することを勉強する科です。私が生まれて初めてにわとりを育てて、肉にした体験を話したいと思います。高校1年生の9月頃に、授業で一人一羽のひよこを育てることになりました。最初は手の上に乗るくらいの大きさで、ふわふわとしていて、ピョピョと可愛い声で鳴くひよこを自分のペットのような気持ちで育てていました。日がたつにつれて大きくなり、1か月も過ぎたひよこは、とさかが生え、羽毛も生え替わり、鳴き声にも変化が現れてきました。その頃、担当の先生に言われた言葉があります。それは、「家畜はペットではなくて、自分たちの生活を支えるための食料になるもの」という言葉です。その言葉を聞いた時、私は心が「キュッ」と痛くなりました。ひよこを育て始めて、3カ月、ひよこはもう大人になっていました。その姿を見て、私はすごく怖いと感じ始めました。もう少しで、今まで大事に育ててきたひよこを自分の手で肉にする日が近づいていることに、怖さとつらさを感じていたからです。そして、運命の日が近づくと、1週間前からえさの量を減らしていき、前日には断食させる。ご飯を食べたいのに食べられない自分のにわとりを見ると悲しくて、私も食事がのどを通らなくなりました。そして、「とさつ」の日、一人一人順番に自分が一生懸命育ててきたにわとりを自分の手で息を止めるのです。私はその場から逃げたくなり、自分の番が来て、牛刀を持った時、手が震えて視界がぼやけてしまったことを覚えています。「とさつ」後、自分たちの手で、にわとりを解体し、家に持ち帰り、すべてを残さず食べる。その日は自分が育てたにわとりを「とさつ」した時のことを思い出し、震える手をいつまでも見つめていました。今まで当たり前前に食べていた肉は、誰かが毎日大切に育て、肉にしてお店に並べているのです。にわとりや豚や牛を私たちの勝手に、まだ生きることができた命を止めているのに、私たちはもう食べられないからといって捨てる。命を粗末にしていることに気づき、今まで命をもらっていたのだということに気づかされたのです。

私は、肉牛という黒牛の担当をしています。毎日一頭一頭の顔を見て、「体調はどうか」「部屋はきれいか」「食欲はあるか」等をチェックしています。何回か分娩にも立ち会っています。母牛が苦しみながら新しい命を生み出そうとしている瞬間、お母さんも私をこんなに大変な思いをして生んでくれたのかと涙が止まらなくなります。本当に素晴らしい瞬間です。

私は、命の大切さや素晴らしさを、こんなに身近に感じることができていることに感謝しています。今、話を聞いてくれている皆さんの中に、自分も体験したいなと思ってくれたら、うれしいです。そして、命を絶対に粗末にしないでほしいと思います。どんな命だって、粗末にははいけません。家畜の命もみんなが残さずに食べてくれたら、その命を粗末にしたことにならないのです。みんなは命をいただいているのです。

山田さんには、自分の中学校時代の話もしてもらいました。山田さんの「命は大切である」という思いを、子どもたち一人一人はきちんと受け止めてくれたと思います。

## 子どもの感想から

・今日は本当にありがとうございました。私は「牛の涙」という言葉を聞いて、やっぱり動物も「死」ということはわかるんだなあと思いました。動物を殺してしまうのは悲しいことだけど、私たちが生きていくためには仕方がないから、犠牲に感謝してこれからは生活をしていきたいと思いました。私は兄が兵庫県立農業高等学校に通っているので、県農祭に行ったことがあります。牛たちはこれからいつまで生きられるかわからないのに、とても生き生きとしていて、必死に生きているのは動物も一緒だと思いました。私は、県農で勉強がしたいと思いました。「とさつ」などは残こくでいやだけど、感謝の気持ちをもちたいと思いました。これからも頑張ってください。昼休み、少しお話ができてよかったです。本当にありがとうございました。

・命の勉強、ありがとうございます。私ももし鳥を育てていたら、首を切るなんてかわいそうと泣いてしまうと思います。けど、私たちが食べるためにはそうするしかないし、ありがたさをもって食べたらいいなと思いました。あと、牛の種類とか覚えていてすごいなと思いました。福田小学校の卒業生として、私も山田さんみたいな胸のはれる中学生になります。山田さん、苦しいこと、悲しいことまでお話をしてくれてありがとうございます。命を大切にしていきたいと思います。

山田詩織さん、卒業を目前にした6年生に貴重なお話をありがとうございました。一人一人の心に山田さんの想いは届いたと思います。6年生の皆さんが、数年後、山田さんのように後輩に話を語れるよき先輩になることを期待しています。

#### イ 平成21年6月に行われた農業クラブ校内意見発表会での原稿

##### 演題 「命」家畜の命に感謝する心を育てるために

私を見つめる80人の子供達の真剣なまなざし。その真っ直ぐさ。今年の2月私は、自分の卒業した小学校から依頼されて、6年生全員の前で「命」の大切さを伝えるという体験をしました。実のところ、その小学校卒業後の中学・高校生活は、決して特別に立派な心がけて過ごしていた訳ではありません。こんな私が、後輩達に、上手に「命」の大切さを伝えることができるのかという不安でいっぱいでした。ですから、話の準備として、データを集めに行った時に、畜産科の授業をしてくださる先生方に、毎日どのような気持ちで家畜の世話をなさっているのかを教えていただきました。その中で、特に心に残った言葉があります。「毎日、感謝の気持ち、ありがたみを忘れないように世話をしている。」という言葉です。

この言葉を聞いて、1年生の時の、鶏のヒナの飼育解体実習の記憶がよみがえってきたのです。畜産科の1年生全員に、一羽ずつ与えられたヒナ。小さな、モコモコした黄色いひよこは、「命のかたまり」そのものでした。自分の手で、ヒナから成鶏まで育てている3ヶ月の間、私は毎日のように黄色いひよこの成長を楽しみながら、精一杯の愛情を注いでいました。かわいかったひよこに、変化があらわれてきます。黄色だった羽毛は白くなり、目に見えて大きく育っていきます。小さな赤いトサカが見える頃には、もうヒナ鳥ではなく、若鶏と呼ぶのがふさわしく思えます。そして、その日が訪れるのです。言葉では言い表せないほどの葛藤がありました。でも、自分で一生懸命育てた鶏の首に包丁を当てて屠殺する時、私はためらいませんでした。授業をとおして、家畜の役割をしっかりと心深く学ぶことができたからです。私は感謝の気持ちでいっぱいでした。

もう一つ心に浮かぶことがありました。それは肉牛のことです。私は肉牛研究会に入っていました。肉牛は、仔牛から育てて、出荷するまでとても大変です。毎日ブラッシングをしたり、散歩をさせたり、成長に応じて餌の配合を考えたりしなければなりません。もちろん、日々の体調管理も、責任の重い仕事です。毎日毎日世話をしながら、肉牛一頭一頭の顔を見ていると、心の底からつらくなる時があります。「もう少しで出荷」ということが、頭の中をよぎる瞬間です。そんな時、私は、「人間はなんてぜいたくな生き物なんだろう。」と強く思います。肉牛たちは、出荷されていくとき、どう感じて、何を思っているのだろう、そう考えてしまうこともよくあります。なかなか出荷の車に乗ろうとしなかった牛のことが、思い出されるのです。」

みなさん、私達農業高校生は、同じ年代のだれにでもできるわけではない、貴重な得難い体験を日々させてもらっています。だからこそ、私達一人一人が、命の大切さについて、しっかりと考え、発信していかなければならないのではないのでしょうか。当たり前のように食べているみなさんは、まったく家畜に対する感謝など感じていないのではありませんか。だけど、みなさんが、少しでもそんな心をもって食べてくれたなら、屠殺されていく家畜たちも救われると、私は思うのです。だから私は、この農業高校の中からもみなさんに訴えます。「家畜の命に感謝する気持ち」を忘れないでください。

あの冬の日、ひたむきに聞いている80人の小学6年生を前にして、私はそんな願いを込めて話しました。「鶏肉も、豚肉も、牛肉も、当たり前のように食べてはいけないんだよ。一つ一つの命が、みんなのために犠牲になっていることに、感謝する気持ちを忘れないでね。」

#### ウ 先生の振り返り

学びが広がっていく感じが感じられる。先輩の話聞いた小学生にとっても、後輩に話をするために準備をして臨んだ高校生にとっても、貴重な体験であったと思う。そして、この体験を全校生に披露する場を得たことで、また学びの成果が広がっていくように思えた。私たち教員は、「生徒から生徒へ」その感動や学びを伝えていく仕組みや機会を、少しでも多く用意したいものだと考える。

5次	支えてくれた人のおかげで「今がある」ことに思いをいたし、生きて在ることに感謝の気持ちをもつ。
----	--

- (6) 自分の心の中を観察（「内観」）する。「お世話になった人」「かけがえのない人」について、「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」などを思い出す。

（全2時間で実施）

#### ア 本時のねらい

「内観」を通じて、他者によって支えられてきた自分、愛されてきた自分、生かされてきた自分に気づく。また、お世話になった人に「して返したこと」を確認することで、自分の行動を振り返り、自己肯定感を持つ。「誰かの役に立つこと」（自分の「使命」）について、思いをめぐらす。

#### イ 指導のポイント

##### (ア) 感動の体験

ふだん何気なく接している人や動物などが、いかに自分の支えになってくれているかを知り、「生かされている」自分に気づかせる。

##### (イ) 感性を育む

「内観」後に「喪の作業」を扱った絵本を取り上げることで、たとえ、亡くなった人でも自分の中で生き続けていることを感じさせる。

##### (ウ) 想像力の育成

お世話になった人が自分をどれだけ大切に思ってくれているかに思いをいたし、誰かにとって支えとなりうる自分の存在を確認させる。

#### ウ 準備物

- ・「内観」記録用紙
- ・絵本『くまとやまねこ』

#### 参考 あらすじ

突然、最愛の友達「ことり」をなくしてしまった、くま。くまは手作りの箱に花びらを敷き詰めて、そっと「ことり」を入れ、持ち歩くようになります。箱の中を見るたびに困った顔をする森の動物たち。そしてみんな決まって言うのでした。「くまくん、ことりはもうかえってこないんだ。つらいだろうけど、わすれなくちゃ」くまは暗く締め切った部屋に一人閉じこもってしまいます。

久しぶりに外へ出たくまは、旅をするやまねこに出会います。それはくまにとって、光あふれるあたたかい時の訪れでした。やまねこの奏でるバイオリンの音に癒されたくまは、「ことり」との思い出に存分に浸ることができたのです。くまは、「ことり」のためにお墓をつくりました。そして、くまとやまねこは音楽を奏でる仲間として、一緒に旅に出ることになりました。

#### エ 先生の準備

- ・教員自身が「内観」時のファシリテーターを務めることができるような研修を受ける。
- ・教員自身の「内観」を事前に行い、「お世話になった人」「かけがえのないペット」などについて、生徒に自己開示できるようにする。
- ・10秒呼吸法を習得する。



## オ 展開（1校時）

授業の展開  
（導入）

## 1 ウォーミングアップ

まず、呼吸法をして、しっかりと心を落ち着かせましょう。（腹式呼吸：10秒呼吸法）

（留意点・ポイント）

- ・ストレスを和らげ、気持ちを落ち着かせるために、呼吸法が役立つことを説明し、取り組む意欲を高める。

## 2 学習のねらいについて知る。

この時間は、自分の意識を「内観」して記録します。「内観」とは、自分で心の中を観察してみることです。

（留意点・ポイント）

- ・記録用紙を配布し、「内観」の意義を説明する。

（展開）

## 3 自分が他者に支えてもらった体験について思い出す。

これから、今までお世話になった人を一人選んで、その人のことを思い出してみましょ。家族でも、友人でも、かまいません。その人に対して自分はどのように接してきたのかを十分に思い出して調べます。「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」はどんなことがありましたか。できるだけ、相手の立場に立って思い出してください。人でなくても、ペットでもかまいません。

（留意点・ポイント）

- ・あらかじめ「内観」しておいた、教員自身の、「親への内観」と「亡くなったペットへの内観」の体験を話した。
- ・生徒は、誰に対して調べるのかを決める。
- ・楽な姿勢をとり、目を閉じる。教員が指示した3つの項目にしたがって「内観」する。

## 4 1項目ごとに静かに目を開けて深呼吸し、気持ちを持ち替えて、「内観」用紙に記入する。

目を閉じて、具体的な事実を思い浮かべて、用紙に記録しましょう。

（留意点・ポイント）

- ・丁寧に振り返らせて、しっかりとイメージさせる。
- ・切り替えられるように、1項目ごとに深呼吸をさせる。
- ・記入しない生徒に対しては強要しない。

## 5 シェアリング

隣同士や近くの人と感想を話し合いましょ。

（留意点・ポイント）

- ・感想を話し合いたくない生徒に対しては、強要しない。
- ・人によって、様々な体験があることを感じさせる。

（まとめ）

## 6 本時の感想を書く。

「お世話になった人」のことを「内観」することで、過去における「自分の姿」を深く見つめることができたと思います。自分が、どれだけ支えられて生きてきたかということや、一人では生きられないということを再確認したのではないのでしょうか。

（留意点・ポイント）

- ・実施後すぐに「内観」記録用紙を読み、気になる生徒があれば、直ちに対応する。

（3校時）

授業の展開

（導入）

### 1 1校時の授業、「内観」を振り返る。

先程、みなさんに記入してもらった「内観」の感想を紹介します。

（留意点・ポイント）

- ・クラスの生徒がどういうことを書いているかを、名前は伏せて紹介する。
- ・様々な「内観」があることを、理解させ、「内観」できていないこともまた、一つの気づきであることを伝える。

（展開）

### 2 絵本の紹介を受ける。

「内観」をしたことで、いろいろな思いが胸をよぎったと思います。中には、もう亡くなった方や、ペットについての「内観」もありました。ここで、友を亡くしたことをテーマにした絵本「くまとやまねこ」を紹介します。

（留意点・ポイント）

- ・教員自身が絵本を読み聞かせるよりも、生徒の中で、皆の前で絵本を読みたいという生徒がいれば、その生徒に依頼する。

### 3 絵本を読むのを聞きながら、内容を理解し、大切な人を喪うことについて考える。

（留意点・ポイント）

- ・静かに絵本を聴けるように、また、読む生徒が読みやすいような環境を作る。
- ・読み終わったあとの時間を少しとって、それぞれの生徒に振り返らせる。

### 4 シェアリング

隣同士や近くの人と感想を話し合ひましょう。

（留意点・ポイント）

- ・感想を話し合いたくない生徒に対しては、強制しない。
- ・人によって、様々な感じ方があることに気づかせる。

（まとめ）

### 5 日々の生活の中で、たちどまって考えること、思い出すことの大切さを感じる。

絵本の中に登場した、くまの思いは、だれもが必ず出会う悲しみ・苦しさ・切なさでもあります。大切な人を失ったときに何ができるかを考えてもらえたかと思います。

また、自分自身がだれかにとって大切な人であることについても考えてみましょう。

（留意点・ポイント）

- ・生徒の様子を見ながら、気になる生徒がいれば対応する。
- ・気になる生徒については、担任、養護教諭に連絡して、その後の様子についても見守っていく。

## カ 生徒の振り返り（「内観」記録より）

## (ア) 誰に対して「内観」したか

- ・動物（10）  
愛犬・愛猫（8） 担当の牛（1） 解体実習した鶏（1）
- ・家族（6）  
親（4） 姉（2）
- ・友人（6） 先輩（2） 恋人（2） 先生（2） 白紙（7）

## (イ) 「内観」の内容

- ・動物
    - （愛犬、愛猫）  
一緒にいると癒された。もっと世話をしあげたら良かった。
    - （担当の牛）  
ブラッシングをしてあげた。背中を舐めるなどして甘えてきた。  
散歩に行ってもやれない日があった。
    - （解体実習した鶏）  
ひよこが鶏になるまでを観察できて、自分も成長できた。  
食べるのはとてもつらかったけど、食べたことで喜んでくれていると思う。  
屠殺する前に落としてしまって、もも肉が堅くなって捨てなければならなかったことが申し訳ない。
  - ・家族
    - （親）  
学校のことでつらくなったとき、励ましてくれた。  
今まで育ててくれた。  
両親が離婚したとき、父を選ばなかったことが申し訳ない。
    - （姉）  
話を聞いてくれたり、遊びに連れて行ってくれたりする。  
照れるから「ありがとう」が言えない。  
服などのプレゼントをあげたり、もらったりした。  
困っているときに手助けしてくれる。
    - （友人）  
相談に乗ってくれ、励ましてくれる。傷つけてしまったこともある。  
思い出したくないこともある。将来の夢を話し合う。おごってもらおうと申し訳ない。
    - （先輩）  
悩んでいるとき、隣で話を聴いてくれた。誉めてもらってうれしかった。  
いろいろなことを優しく、厳しく教えてくれる。
    - （恋人）  
励ましてくれた。心配かけないようにした。無理なことを頼んだこともある。  
泣いてはいけないのに泣いてしまった。困っているときにたすけてくれた。  
弁当やケーキを作ってくれた。つい、要らんことを言うってしまう。
    - （先生）  
学校に行けなくなったとき、何とか行けるようにしてくれた。  
先生ががんばってくれる気持ちに応えたいと思った。  
期待に応えられないこともあった。  
優しくしてくれた。礼儀や技を教えてもらった。優勝して喜んでもらえたと思う。
- (ウ) 「内観」を経験した今、感じていること
- ・一人に絞って書くのが難しかった。
  - ・自分にとって大切な人だと改めて感じた。
  - ・ちょくちょく「内観」した方が良かったと思った。
  - ・改めて振り返って気づいたことがあった。深くまで考えた。
  - ・紙には書ききれなかった。

- ・かなり落ち着けた。
  - ・大人になってもつきあっていける友達だと思った。
  - ・ゆっくり落ち着いて物事を考えることができた。
  - ・昔のことを思い出すことができて良かった。
  - ・言いたいことをはっきり言える人間になりたいと思った。
  - ・かけがえのない人は誰なのか、とても悩んだ。もっと人のことを考えないといけないと思った。
  - ・こういうのは何となく苦手だ。
  - ・正味、思い出すのがしんどい。
  - ・走馬燈のように、過去のいろいろな思い出がよみがえってきた。
  - ・担当牛をもらうまでは、わからなかったことがわかってうれしい。
  - ・こういう機会があまりないので良かった。
  - ・一日一日を大切に生きることが大切だと感じた。
  - ・ペットを失うときがやって来ると思うと、悲しくてどうにもならない。時間の経つのがいや。
  - ・自分を見直すのに大事な時間だと思う。
- (I) 「内観」できなくて白紙だった生徒の感想
- ・たぶん、お世話になった人やかけがえのない人はいるだろうけど、それに気づけなかった。そういう人を失ってから気づくと思う。それはもう、遅いと思うけど、近くにいるうちは気づけないと思う。
  - ・難しかった。お世話になっているのはわかっているけど、何を書いていいのかわからなかった。
  - ・よくわからない。

キ 先生の振り返り（次の実践に向けて）

落ち着いた良い時間を過ごせたという生徒がいる反面、思い出したくないことを思い出したという生徒もいた。白紙を提出した生徒も、真剣に考えていたようである。「書けないこと」に気づく、あるいは、「内観」できないことがわかることも大切な自己認識である。親に対する「内観」をした生徒の中には、つらい思いが残った者もいたようである。家庭が安心できる基地としての役割を果たしている場合、却って親への「内観」をしなかったのかもしれない。

「両親が離婚したとき、父を選ばなかったことが申し訳ない。」と記入していた生徒のことが気になったので声をかけた。また担任には、生徒全員の「内観」記録用紙に目をとおしてもらい、心配な生徒がいないかということを確認してもらった。また記録用紙に目をとおしてもらうことで、今後の生徒理解の一助にしてもらいたいと考えた。

様々な家庭環境があり、対人関係がうまく結べないような生徒もいる。そうしたことを考え合わせると、『内観』の対象は、人でなくてもいいから」という、今回の指示は、生徒の「内観」を進める上で、選択肢が広がったのではないだろうか。畜産科の生徒で、もともと動物が好きな生徒が集まっているから、動物への「内観」が予想以上に多かったのかもしれない。

1日のうちで2時間をとれたので、ゆっくりと生徒の様子を観察できた。「内観」のあと、様々な後悔の念を感じる生徒もいるが、今回のように「喪の作業」を扱った絵本を採り上げること、失ったもの、亡くなった人に対する思いを浄化できる可能性もあるのではないかと考えた。絵本の読み聞かせを聴いたあとの「振り返り」は、あえてしなかった。泣いている生徒が何人もいて、そのままにしておきたい気持ちだった。動物が主人公であることもまた、優しい気持ちにしてくれたと思う。

## \*授業プリント

「お世話になった人」「かけがえのない人」に対する「内観」の記録用紙

「 \_\_\_\_\_ 年 組 \_\_\_\_\_ 番 氏名 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_ 人」

\_\_\_\_\_ に対する自分について調べます

1 「してもらったこと」「うれしかったこと」にはどのようなことがありましたか？

事実 ・

・

・

そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう。

---



---

2 「して返したこと」「喜んでもらえたこと」にはどのようなことがありましたか？

事実 ・

・

・

そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう

---



---

3 「迷惑をかけたこと」「申し訳ないと思えたこと」にはどのようなことがありましたか？

事実 ・

・

・

そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう

---



---

4 「内観」を経験した今、感じていること

---



---



---

## 10 実践を終えて

## (1) 先生の振り返り

## &lt;クラス担任の感想&gt;

解体実習の際は、ただ解体するというだけでなく、「命としていただきなさい」という指導をしている。さっきまで生きていたものを自分自身の中に取り入れるという体験を、自分自身が育てた生き物で実践することで、生徒たちの心も成長すると思う。教科書を読むだけでは感じ取れない「生き物とのつながり」が実感できると考えられる。

特に本校の場合は、いわゆる「街の子」が多く、ペットは飼っていても家畜などが身近にいない環境で育っている生徒が多く、保護者も含めて生徒たちはこうした体験をしていない。自分で育て解体した「鶏肉」を自宅で持ち帰り食べることで、保護者と「命」について向き合うことは大きな意義があるのではないかと思う。

## &lt;筆者の振り返り&gt;

農業高校ならではの実践ができたと思う。「命」と日々向き合っている生徒たちであるが、自分たちの実践を文字にして書き、言葉にして発することで、より深く「命の大切さ」を実感できたと思う。体験や思いを言語化することで、自分を肯定する気持ちが育ってくる。そして、その「ことば」を他者に伝えることで、自分の生き方を振り返ることができる。

「命の大切さ」を実感することで、自分も他者もお互いに支え合いながら生きていることに気づき、感謝の念をもってくれればと願う。私たちは皆、幸せになるために生まれてきた。しかし、他者を幸せにすることができて初めて、本当の幸せを実感できる。社会に巣立っていく生徒たちが、自分の命を大切に使う生き方を模索するきっかけになってほしい。

今回の実践をとおして、教員が一つの柱を立てて教材を組み立てることが、何より大切だと思えた。私自身もまた生徒たちによって、周りの先生方によって「生かされていること」を実感した。こうした機会を与えていただいたことに感謝している。

## (2) 今後の課題

## ア 授業実践上の課題

農業高校ならではの実践であったということは、普通高校などでの実践は難しいということでもある。しかし、教科を横断して取り組んだ事例として考えた場合、最も課題となるのは、科や担任との連携であろう。今回の実践例では、実践者が畜産科の担任をした経験があったということが、科との連携を進めやすい大事な要素であった。畜産科の実習や行事にできるだけ参加することで、生徒の気持ちに寄り添うことができるように心がけた。

## イ 家庭・地域との連携についての課題

畜産科として「命」と向かい合う学習をすることについて、生徒も保護者も理解しているが、教員側には、生徒の家庭環境や内面を常に理解しようとする配慮が必要である。

特に「内観」の取組などは、生徒と保護者の関係が表面化してくることもあることを十分理解しておかなければならない。

今回、母校の小学校で「命の大切さ」を伝えた生徒の事例のように、生徒の出身校との連携も大切である。本校の場合、全県から生徒を募集していることもあり、学校のある東播磨地域はもちろんのこと、生徒の居住区との連携も必要である。

## ウ 学校の組織運営上の課題

すべての教員が「命を大切に作る」という視点を持つことは言うまでもないが、学校全体の組織として取り組むためには、教員間の相互理解や協力が欠かせない。お互いの実践を理解し交換し合えるような研修の機会が必要である。

また、部との連携が欠かせない。キャンパスカウンセラー、養護教諭にもあらかじめ、実践内容を相談した。実践中に少しでも心配なことがあれば、すぐに各担当者に連絡し、対応していくことが大切である。

## 11 参考・引用文献

- ・『明解 国語総合』 三省堂 2006
- ・佐野洋子 『100万回生きたねこ』 講談社 1977
- ・湯本香樹実/作 酒井 駒子/絵 『くまとやまねこ』河出書房新社 2008
- ・野田暢子 「構成的グループエンカウンター『内観』の試み」 兵庫県立教育研修所『心の教育授業実践研究第2号』 2000